

学会発表渡航支援報告書

(ふりがな) 氏 名	きむら しせい 木村 至聖	所属・職名 日本学術振興会特別研究員 (PD)
e-mail	yrp@par.odn.ne.jp	
発表題名 (英語)	The regeneration of memory: a case study of Gunkanjima (Hashima colliery)	
著者名	Shisei KIMURA	
会議名 (英語)	REGENERATING THE COALFIELDS: HISTORY AND EDUCATION IN SOUTH WALES AND JAPAN	
開催地(国、市)	Swansea, Wales	
参加期間	2009年9月10日 ~9月11日	
<p>本シンポジウムは、日英の旧産炭地・炭鉱の研究者が集まり、「炭鉱」という共通言語を通して、その歴史を踏まえた地域再生方法について議論することを目的としたものである。</p> <p>日本側からは、空知・常磐・三池・端島（軍艦島）など全国の産炭地域を網羅する社会学専攻を中心とする研究者により構成された旧産炭地研究会（JAFCOF, JApan research group on Former COalFields）のメンバーが参加した。旧産炭地研究会は、資料の保存・活用（アーカイブス）による地域社会との関係の研究を行っており、2007 からイギリス・南ウェールズ産炭地域の Swansea 大学との研究交流を重ねてきた。本シンポジウムはその活動の一環である。</p> <p>Swansea 大学は、1970 年代に南ウェールズの炭鉱が次々と閉山するなか、散逸の危機にあった資料を収集し、体系的なアーカイブ（文書・写真・日記・録音データや労働組合旗などの保管システム）を構築してきた。それが今日、South Wales Coalfield Collection、および Miners' Library という施設に結実しており、これらの施設が炭鉱の記憶の保存のみならず、地域に根づいた生涯教育の拠点としても機能し、その後の地域再生に結びつく地域の誇りを涵養してきたことは特筆すべきである。今回のシンポジウムには、この Swansea 大学を中心として、南ウェールズの歴史学者、社会学者、そしてアーカイブのライブラリアンやアーキビストといった多彩なメンバーが参加している。</p> <p>木村は、日本側からの報告者の一人として参加し、この 2009 年 1 月にユネスコ世界遺産暫定リストに記載され、4 月から上陸観光ツアーが許可された長崎市の端島（通称・軍艦島）の事例を報告した。この中で報告者は、軍艦島の炭鉱としての歴史、および近年の日本での産業遺産への関心の高まりという背景を説明し、その上で軍艦島の世界遺産登録運動や観光資源としての活用の実態を紹介した。とりわけこうした近年の動向をめぐり、いかなるアクターがいかなる動機から、いかなる関わりを持っているのかという点について、関係者への聞き取り調査に基づいて整理した。その結果、元住民の関与が弱い一方で、多くの外部メンバーを含む NPO や、周辺地域に住む比較的若い世代の住民が、軍艦島ツアーの実施や手づくりの資料館の構築などを通じて、積</p>		

学会発表渡航支援報告書

極的に関与していることがわかった。一方でこうした現状の課題としては、第一に、上記のような若い世代だけでは、肝心の炭鉱での仕事の現場についての知識が不足しており、今後より一層元住民の協力が必要となること、第二に、これらのツアーが関係者の地域への愛着や積極的なネットワークングによって支えられている一方で、やはり経済的には多くの困難が伴っていること、以上の二点を挙げた。

この報告に対し、フロアからは、軍艦島のような島の炭鉱という事例は非常に珍しく、興味深い報告であるというコメントのほか、現在行われている軍艦島上陸ツアーについての具体的な状況についての質問が寄せられた。また、閉山に至った経緯や日本の労働運動史など、基本的な情報についての質問も相次ぎ、最終的に労働組合の果たした役割の違いなど、興味深い論点が浮かび上がった。

この他に、南ウェールズ炭田の歴史の専門家である Chris Williams 教授 (Swansea 大学) による、日本と南ウェールズの炭田の産業衰退期のアプローチの違いを指摘する報告や、Colin Trotman 教授 (Swansea 大学) による、南ウェールズ炭田における成人教育の重要な影響についての報告などがなされた。

シンポジウム終了後には、先述のアーカイブ (South Wales Coalfield Collection、および Miners' Library) への訪問も行われた。日本からの訪問団は、シンポジウムの前後のエクスカージョンで、Swansea 大学の生涯教育施設や、2008 年に閉山したばかりの Tower 炭鉱などをホスト側に案内してもらい、計 6 日間滞在した。この間、懇親会なども含めて、日本とウェールズの旧産炭地の再生をめぐる活発な情報・意見交換および親密な交流が行われ、非常に有意義な機会だったように思う。

